

令和6年度(2024年度)事業評価(案)

(大項目) 1. 地域の歴史・文化・自然遺産を守り、未来へ伝える博物館									
目 標		吹田市に残された大切な歴史・文化・自然遺産などの地域の文化に関する資料を継続的に収集、整理し、市民共有の知的資産として未来にも利用できるように保管管理します。また、地域の歴史と文化に関して調査研究を推進し、その研究成果が市民の知的財産として活用されるようにします。							
(中項目)①資料の収集・保管・活用				自 己 評価点	【自己評価】	自 己 評価点	【外部評価】	外 部 評価点	
(小項目)	(重点項目) a. データベースの構築	指標・目標	データベース構築の進捗度	A	《資料の収集・保管・活用》 館蔵資料データベースの構築・公開は令和6年3月に完了した。今後はデータベースへの資料登録を着実に進めていくことに努めていく。 重点収集資料は、西村公朝資料 242点の寄贈があり、博覧会関連資料は寄贈・購入により14点を収集した。 [重点収集資料] 西村公朝資料 242点 博覧会関連資料 14点 [歴史] 327点(資料総数 30,246点) [美術] 242点(資料総数 2,033点) [考古] 0点(資料総数 4,414点) [民俗] 139点(資料総数 4,835点) 収蔵環境の維持については、3年に1回の収蔵庫燻蒸を実施した。また、新規収蔵資料に対しては年2回の燻蒸庫燻蒸を実施した。どちらも良好な効果を得られている。	A	《資料の収集・保管・活用》 懸案であった資料データベースの公開が、令和6年3月よりホームページ上で始まったことは大きな前進である。継続して新たなデータも積極的に収集しており、データベースの整備・公開は、市民による利用環境を格段に改善するだけでなく、博物館の効率的な運用にも利便性を与えるものである。「未来に伝える」という目標と合致し、吹田市総合計画都市魅施策「文化・スポーツに親しめるまちづくり」とも整合的である。今後はデータベースの充実等の目標化を検討し、その充実の度合い、活用の仕方を評価項目とすべきだろう。 資料の収集については、寄贈及び購入により資料数が充実するようになり、重点項目、基本項目において着実に実施されている。とりわけ西村公朝資料242点の寄贈により重点収集資料の充実が図られた点は大きな成果であり、寄贈を受けたことも高く評価してよい。資料の活用についても特別展などを実施し、広く市民に対して公開している。資料の保管については燻蒸処理を着実に実施しているが、収蔵環境の維持は燻蒸ガスの供給が困難になることから、今後はIPMでの適切な管理を目指されたい。	AA	
		実績	自己評価欄に記載						
	(基本事業) b. 資料の収集	指標・目標	収集方針に基づいた資料収集を行い、適切に整理・登録を行っているか。	A					
		実績	自己評価欄に記載						
	(基本事業) c. 収蔵環境の維持	指標・目標	新規収集資料燻蒸回数(2回/年) 館内環境調査回数(2回/年) 収蔵庫燻蒸回数(1回/3年)	A					
		実績	新規収集資料燻蒸回数 2回 収蔵庫燻蒸 1回 館内環境調査回数は不実施年						
(中項目)②調査研究					大規模改修に伴う常設展示大規模リニューアルに向けて、他館の動向は引き続き調査を行った。加えて、令和7年度に博物館利用に関する市民ニーズ調査に実施すべく準備を始めた。 本年度の学芸研究会は、文化財調査員の2本の研究発表を行った。いずれも館報25号に掲載した。 ・「吹田村早田家の家訓」(安永寛) ・「昭和9年近畿防空演習と吹田ー「原町文書」所収防空演習関係資料の紹介ー」(石川雄大)	A	《調査研究》 特別展図録での研究成果の公表および館報での論文の刊行など研究成果を積極的に公表している。大阪万博関係資料・博覧会関係資料の調査などは吹田市と関係の深いものであり、紙芝居関連資料の調査もジャンルとしてユニークなものである。その調査成果を公表した秋季特別展「紙芝居の歴史と阪本一房」は内容的にとっても良い展示で、図録は基礎研究資料としての価値もあり、吹田市民に吹田の“文化力”を広く知らしめる機会の一つともなって良い企画であった。学芸研究会では、文化財調査員が「吹田村早田家の家訓」、「昭和9年の近畿防空演習と吹田ー原町文書」などの研究発表を行うなど、調査研究においても意欲的に取り組んでいる。 また、常設展示大規模リニューアルに向けて、市民のニーズ調査を準備している点は、市民と共にある博物館として高く評価できる。吹田市で学ぶ児童・生徒からのニーズ調査を実施する方針を立てたことは意義がある。		
(小項目)	(基本事業) a. 地域史に関する調査研究	指標・目標	調査研究件数 13件	A					
		実績	地域資料調査 17件						
	(基本事業) b. 博物館運営に関する調査研究	指標・目標	調査研究件数 3件	A					
		指標・目標	自己評価欄に記載						
(基本事業) c. 学芸研究会)	指標・目標	学芸研究会実施回数 (2回／年)	A						
	実績	学芸研究会実施回数 2回							

(大項目) 2. 地域文化の情報発信拠点としての博物館									
目標		地域の歴史と文化を紹介する常設展示と幅広い利用者層が楽しみ、参加、体験できる企画展示により市民の多様な学習活動に応じるとともに、市民の多様な自主的学習を支援するための生涯学習の拠点とします。また、地域の文化の情報拠点の役割を担い、他の博物館、文化施設とも広く連携を図ります。そのため、博物館の情報公開性を高め、地域文化に関する資料や博物館運営に関する情報を迅速に発信公開します。							
(中項目)①常設展示				自己評価点	【自己評価】 《常設展示》 大規模改修に伴う常設展示リニューアルに関する資産経営室との協議は引き続きを行ったが、行政評価2次評価において市民ニーズに沿った博物館の運営が求められたことから令和7年度に市民対象に博物館ニーズに関するアンケート調査を実施する予定。また、「学芸員のおすすめ展示」は6回実施し、館蔵資料の公開・活用に努めた。 「さわる月間」では初めての試みとして知的障害者向けワークショップを開催し、参加者には概ね好評であったが、今後の展開は課題である。 《企画展示》 企画展示は、春季特別展・企画展・夏季展示・博物館実習展・秋季特別展・特別企画の6回を実施した。来館者アンケートでは、すべての展覧会で約9割が「とてもよかった・よかった」と評価し高い満足度を得られて、展示目標を達成できた。 西村公朝資料については、スポット展示で「西村公朝コレクション」と題し、西村が使用していた数珠の展示と、数珠があらわす意味などについて、西村の著作に基づいた各宗派の解説とともに紹介した。 《地域学習の支援》 イベントの回数、参加人数はともに指標値を上回った。出前講座は、主に図書館地区公民館、市民センター、コミュニティセンター等の市施設に講師を派遣したが、回数と参加人数はこちらも指標値を超えている。徐々にではあるが、コロナ禍からの回復の兆しがうかがえる。 レファレンスは前年度の67件よりは減少した。質問手段内訳は観覧者5件、来館21件、電話23件、郵便1件、Eメール1件で、観覧者による質問は減少したが(前年度は24件)、来館と電話はやや増えた。観覧時における質問のし易さを工夫することも必要であろう。 《情報発信》 ホームページはセキュリティ上の問題から令和5年度に本庁のサーバーに移転したためアクセス数は集計していない。フェイスブックは前年度より多く投稿し(前年度は30件)、吹田市公式LINEセグメント配信も44回行った。LINEのセグメント発信によってイベントへの応募者が増える効果が見られた。 本年度の取材・報道は、3件にとどまった。メディアに向けていかに情報を提供するかが課題である。				
(小項目)	(重点項目) a. リニューアル	指標・目標	リニューアル計画の進捗度		B	自己評価点	【外部評価】 《常設展示》 リニューアル計画について、市民ニーズを把握することはとても大切である。十分な予算の確保ができなかったが、有益な結果が出るよう準備を進められた。昨年も指摘したが、大規模改修に向けたスケジュールを着実に進め、リニューアルの実現に確実に繋げるとともに、展示内容を精査し、展示論の到達点を踏まえたリニューアルとなるよう期待している。 「さわる展示」は、先進的な取り組みをされている。新たな企画として、市立の公共博物館にて全国的にも稀有な「知的障がい者向けワークショップ」の実施を試みた点は高く評価できる。吹田市第4次総合計画基本計画「障がい者の暮らしを支えるまちづくり」あるいは「地域での暮らしを支えるまちづくり」と連関させつつ、見つかった課題を検討して事業の充実に結び付け、今後の展開を考えていってほしい。 次項の「市民との協働」の項目とも共通するが、学芸員活動において調査研究や展覧会企画のような創造性が要求される以上に、持続して活動することには大変な努力を要する。その点でのマンネリや館員の精神的疲弊がおきかないような活動の進め方が大切である。 《企画展示》 企画展示は少ない予算で、春季特別展・企画展・夏季展示・博物館実習展示・秋季特別展・特別企画と6回実施し、多くの関連行事を展開するなど充実した内容を提示できている。いずれの企画展示も来場者アンケートの結果を見ても、満足度が得られている。 《地域学習の支援》 イベントや出前講座などを積極的に実施しており、参加人数も上昇傾向にある。多様なイベント・出前講座・レファレンスとも目標を上廻っているが、博物館利用者総数は2020年のCOVID19流行により、コロナ禍直前4年の平均約3万5千(人/年)から終息宣言後1万(人/年)台後半と減じ、その後の回復が伸び悩み、コロナ禍の影響が残っている状況である。コロナ禍によるライフスタイルの変化で外出に関して市民の動きが鈍くなり、そのために「講座受講者」数が伸びず、結果として利用者数の復旧のレベルに見合っていないとも考えられる。アフターコロナにおける利用者の動向変化についての調査等も必要ではないだろうか。「すいた歴史散歩」、「観梅会」、「お花見コンサート」などは引き続き実施してほしいイベントである。推進願いたい。 《情報発信》 常設展示および企画展示を活用した情報発信は確実に実施されている。フェイスブックによる投稿件数が増えており、これはスマホを通じて気楽に博物館と接点を持つことを望む市民が増えていることを示している。ただ、SNSでの発信が市のメディアに投稿しているため、絶対数が少ないとも思う。せめて特別展開幕時には(客寄せ、周知のため)何本かの投稿がほしい。情報発信は、従来の方法以外での宣伝活動が必要であろう。例えば、若者層が活用しているSNS(Xやインスタグラム)での情報発信を検討してもよいかもしれない。小・中学生にアイデアの募集をしても面白いかもしれない。 また、ホームページへのアクセスが増えるような工夫が必要である。小・中学生の長期休業期間の展示に、子供向けの内容を取り入れると、より多くの情報発信ができるのではないかな。ホームページ等で、地域文化を学習・体験できるようなコンテンツが充実すると更によい。 <th rowspan="4">外部評価点</th>	外部評価点	
		実績	自己評価欄に記載						
	(重点項目) b. さわる展示	指標・目標	「さわる月間」の開催(1回/年)		A				
		実績	実施						
(中項目)②企画展示									
(小項目)	(重点項目) a. 特別展等の開催	指標・目標	展示目標は達成できているか。		A	A	《外部評価》 《企画展示》 企画展示は少ない予算で、春季特別展・企画展・夏季展示・博物館実習展示・秋季特別展・特別企画と6回実施し、多くの関連行事を展開するなど充実した内容を提示できている。いずれの企画展示も来場者アンケートの結果を見ても、満足度が得られている。	A	
		実績	自己評価欄に記載						
	(重点項目) b. 西村公朝資料の展示と活用	指標・目標	展覧会実施の有無		A				
		実績	自己評価欄に記載						
	(基本事業) c. 企画展示の中期計画立案	指標・目標	展示の中期計画立案の有無		A				
		実績	立案した						
(中項目)③地域学習の支援									
(小項目)	(重点項目) a. 多様なイベントの実施	指標・目標	イベント回数 67回/年 参加者数 2,681人/年		A	A	《外部評価》 《地域学習の支援》 イベントや出前講座などを積極的に実施しており、参加人数も上昇傾向にある。多様なイベント・出前講座・レファレンスとも目標を上廻っているが、博物館利用者総数は2020年のCOVID19流行により、コロナ禍直前4年の平均約3万5千(人/年)から終息宣言後1万(人/年)台後半と減じ、その後の回復が伸び悩み、コロナ禍の影響が残っている状況である。コロナ禍によるライフスタイルの変化で外出に関して市民の動きが鈍くなり、そのために「講座受講者」数が伸びず、結果として利用者数の復旧のレベルに見合っていないとも考えられる。アフターコロナにおける利用者の動向変化についての調査等も必要ではないだろうか。「すいた歴史散歩」、「観梅会」、「お花見コンサート」などは引き続き実施してほしいイベントである。推進願いたい。 《情報発信》 常設展示および企画展示を活用した情報発信は確実に実施されている。フェイスブックによる投稿件数が増えており、これはスマホを通じて気楽に博物館と接点を持つことを望む市民が増えていることを示している。ただ、SNSでの発信が市のメディアに投稿しているため、絶対数が少ないとも思う。せめて特別展開幕時には(客寄せ、周知のため)何本かの投稿がほしい。情報発信は、従来の方法以外での宣伝活動が必要であろう。例えば、若者層が活用しているSNS(Xやインスタグラム)での情報発信を検討してもよいかもしれない。小・中学生にアイデアの募集をしても面白いかもしれない。 また、ホームページへのアクセスが増えるような工夫が必要である。小・中学生の長期休業期間の展示に、子供向けの内容を取り入れると、より多くの情報発信ができるのではないかな。ホームページ等で、地域文化を学習・体験できるようなコンテンツが充実すると更によい。	A	
		実績	イベント回数 77回 参加者数 3,229人						
	(基本事業) b. 出前講座・依頼講座	指標・目標	出前講座回数 21回/年 参加者数 658人/年		A				
		実績	出前講座 24回・参加者数 690人						
	(基本事業) c. レファレンス業務	指標・目標	レファレンス件数 45件		A				
		実績	レファレンス件数 56件						
(中項目)④情報発信									
(小項目)	(基本事業) a. ホームページ	指標・目標	アクセス数 36,264回/年			A	《外部評価》 《地域学習の支援》 イベントや出前講座などを積極的に実施しており、参加人数も上昇傾向にある。多様なイベント・出前講座・レファレンスとも目標を上廻っているが、博物館利用者総数は2020年のCOVID19流行により、コロナ禍直前4年の平均約3万5千(人/年)から終息宣言後1万(人/年)台後半と減じ、その後の回復が伸び悩み、コロナ禍の影響が残っている状況である。コロナ禍によるライフスタイルの変化で外出に関して市民の動きが鈍くなり、そのために「講座受講者」数が伸びず、結果として利用者数の復旧のレベルに見合っていないとも考えられる。アフターコロナにおける利用者の動向変化についての調査等も必要ではないだろうか。「すいた歴史散歩」、「観梅会」、「お花見コンサート」などは引き続き実施してほしいイベントである。推進願いたい。 《情報発信》 常設展示および企画展示を活用した情報発信は確実に実施されている。フェイスブックによる投稿件数が増えており、これはスマホを通じて気楽に博物館と接点を持つことを望む市民が増えていることを示している。ただ、SNSでの発信が市のメディアに投稿しているため、絶対数が少ないとも思う。せめて特別展開幕時には(客寄せ、周知のため)何本かの投稿がほしい。情報発信は、従来の方法以外での宣伝活動が必要であろう。例えば、若者層が活用しているSNS(Xやインスタグラム)での情報発信を検討してもよいかもしれない。小・中学生にアイデアの募集をしても面白いかもしれない。 また、ホームページへのアクセスが増えるような工夫が必要である。小・中学生の長期休業期間の展示に、子供向けの内容を取り入れると、より多くの情報発信ができるのではないかな。ホームページ等で、地域文化を学習・体験できるようなコンテンツが充実すると更によい。	A	
		実績	—						
	(基本事業) b. ソーシャルメディアの活用	指標・目標	フェイスブック投稿回数 25回/年		A				
		実績	フェイスブック投稿回数 55回						
	(基本事業) c. 広報の充実	指標・目標	取材・報道件数 17件/年		B				
		実績	取材・報道件数 3件						

(大項目) 3. 市民と協働し、ともに活動する博物館									
目 標		市民が主体的に博物館の活動に参加できる市民参画を推進します。市民の視点に立ち、市民が集い、市民の参加を得て、希望や意見を反映させる市民とともに創る博物館をめざします。そのための博物館のサポーターとしてボランティアをはじめとする博物館を支える多様な人材を組織します。							
(中項目) ①市民参画と協働				自 己 評 価 点	《市民参画と協働》 ボランティア活動は特別企画「むかしのくらしと学校」ボランティアを中心に行われ、参加人数と活動日数も前年度より増加し、指標値もクリアしている。令和6年度夏季展示実行委員会は活動日数は増えたが、委員数10人で参加者数の確保の課題は解消していない。その他市民協働事業としては、昨年度に再開した「すいた歴史散歩」、「観梅会」、「お花見コンサート」を継続して実施することができた。 アンケートについては、令和6年度は6回の企画展示ごとに来館者向けのアンケートを行った。回答率は全体平均9.7%で、前年度(7.7%)よりは高くなっている。アンケート用紙にQRコードを付し、電子アンケートでも回答できるようにしたが、数件の活用にとどまり、改善策をさぐりたい。 市民との協働事業については、「すいた歴史散歩」、「観梅会」(講演会と梅林散策)、「お花見コンサート」を実施した。 《紫金山公園ビジターセンターの建設準備》 土木部公園みどり室による紫金山公園魅力向上事業における市民参加のワークショップ2回と社会実験1回が行われた。公園内の博物館の役割と紫金山公園ビジターセンターの見直しは、市民の意見を聴きながら公園みどり室と協議していく。				
(小項目)	(重点項目) a. ボランティア活動の支援	指標・目標	活動人数 421人／年 活動日数 64日／年	A					
		実績	活動人数 延べ507人 活動日数 延べ82日						
	(重点項目) b. 市民実行委員会による展示事業	指標・目標	実行委員参加人数 10人 実行委員活動日数 29日	A					
		実績	実行委員参加人数10人 実行委員活動日数58日						
	(基本事業) c. アンケートの実施	指標・目標	企画展示実施回数 (令和5年度は6回)	A					
		実績	アンケート実施件数6件						
	(基本事業) d. 博物館事業への市民の参画	指標・目標	市民講師件数 30件 市民の原稿執筆件数5件	A					
		実績	市民講師件数 41件 市民の原稿執筆件数 5件						
	(基本事業) e. 市民団体との協働事業	指標・目標	連携事業件数 3件	A					
		実績	連携事業件数 3件						
(中項目) ②紫金山公園ビジターセンターの建設準備									
(小項目)	(基本事業) a. 紫金山公園ビジターセンターの建設	指標・目標	ビジターセンター建設計画の進捗度	B					
		実績	自己評価欄に記載						
					自 己 評 価 点	【外部評価】		外 部 評 価 点	
					A	《市民参画と協働》 「ボランティア活動」、「市民実行委員会の展示活動」の重点項目、及び「博物館事業へ市民参加」、「市民団体との協働事業」などの基本事業については、いずれの項目も当初の目標を上廻っており、継続的な市民目線での企画・活動がこれらに反映しているものと思われる。市民参画による展示事業は大変興味深いものであるが、参加の人数確保が難しい点は市民ニーズとの隔たりも感じさせられる事業となっている。若年層の参加を引き出せるような工夫が必要かもしれない。 アンケートについては、吹田市立博物館に限らずいずれの施設でも課題はあり、なかなか難しい面があるが、対面式での回答を求めない限り大きな変化は期待できない。特別展での観覧者アンケートの回収率が10%台、一桁の時もある。この状況は「市民の参加や意見希望の反映」の側面から良い事ではないと考える。他の「小さい所博物館」の中ではかなり努力されている方ではあるが、QRコード利用等のWEB式は、集計等の利便性や用紙回答の補助としては有効だとしても回答率アップには効果は低いと思われる。将来的には若い人を中心に定着していくと思われ、QRコードを分かりやすい位置にプリントするなどの試行錯誤を経ながら工夫していけば利用増大に繋がる可能性はある。筆記場所の充実やアンケート項目の精選、アンケートに答えた人にはちょっとしたプレゼントを進呈するなど、答えてもらうための工夫を検討してもよいかもしれない。		A	
						《紫金山公園ビジターセンターの建設準備》 紫金山公園ビジターセンター建設は、本館の将来にとって極めて重要で、博物館運営にも大きな影響のある事業である。紫金山公園との連携は、市民参加に繋がっていくので、社会実験、ワークショップの試行結果、館のリニューアルも見据えた市民の意見聴取も含めて、十分に分析、検討し、協議してほしい。 他の公園隣接型博物館では、公園利用者も入館者としてカウントしている場合もある(もちろん入館料は取っていないが)。入館者数が全てではないが、吹田市総合計画都市魅力政策2「文化・スポーツに親しめるまちづくり」政策指標7-2-2「吹田市立博物館の年間入館者数」が明記されている。市との協議など、博物館単独で進めにくい問題ではあるが、粘り強く博物館の立場を主張し、より良い計画実現に進んでほしい。			

(大項目) 4. 社会とともに歩む博物館									
目 標		学校、児童、生徒の利用を促進するため、小中高校の教職員と連携や利用プログラムの開発を行い、子どもたちが博物館に親しむ機会を増やします。また、博物館のもつ高い専門性や豊かな情報を社会に還元することで、地域のイメージアップや学芸員のスキルアップにつなげ、博物館活動にフィードバックさせます。							
(中項目) ①連携				自 己 評 価 点	【自己評価】	自 己 評 価 点	【外部評価】	外 部 評 価 点	
(小項目)	(重点項目) a. 北大阪ミュージアム・ネットワーク	指標・目標	事業実施件数 1回/年	A	《連携》 北大阪ミュージアム・ネットワークの活動としては、北摂文化祭(万博花火プロジェクト実行委員会主催、会場:万博記念公園)において各館のパネル紹介と機織り体験、「西アフリカおはなし村」ステージ上演を行った。西国街道連携事業はリレーウォークに事業参加した。 《学校教育との連携》 特別企画「むかしのくらしと学校」は、公共施設の位置や建物の変化を示す地図、新しく建造された道路や線路の交通網、70年万博会場の建設中や会期中の写真、木造校舎のころの教室の写真、台所や学校の変化を描いたイラストなどを新しく制作し、高度成長期以降のくらし・学校の変化を視覚的にわかりやすいようにした。小学校団体見学は22校(前年度は24校)で前年度より2校減少、出前授業は10校(前年度は8校)で実施した。来館した学校の教員アンケートによれば、実物に触り体験でき、子供たちにも興味深々の学びの場になったと好評であった。博物館への社会見学や出前授業の後に、保護者と博物館に再度来館して体験活動を行う児童も多く見受けられたことから、子供たちの高評価の現れとなっている。 中学校との連携では、キャリア教育において、職業体験(3校)を実施し、ハロージョブプロジェクト(1校)、総合的な学習の時間(1校)に学芸員を派遣した。 また、不登校生徒を対象とした「職場体験学習の場づくり」として市教育センターと連携し、吹田市教育支援教室の生徒を対象に施設見学と職業体験を行った。 教職員研修については、学校教育における博物館利用をテーマに夏季休業期間に実施した。 《人材育成》 館園実習では展示実習を再開し、その成果を博物館実習展で公開した。インターンシップは3人・のべ9日で実施した。JICA研修は受入要請なし。	A	《連携》 北大阪ミュージアムネットワーク事業は、北摂文化祭に参加し、年1回の目標どおり実施されている。前年度は「他機関との連携事業」が再開できていなかったため、今年度ようやく再開に至り、コロナ禍以前の活動に戻ったことは評価できる。一方で、北大阪ミュージアム・ネットワークの活動は、かなり歴史を重ねてきているが、コロナ禍以降の再出発において、少し社会に見えにくいような気がする。今後、発信力のある事業展開を期待する。 《学校教育との連携》 小学校団体見学校数・出前授業件数・教員への研修は目標達成している。学校教育では体感できないことを博物館が提供する役割を担っており、小学生の教育向上に大きく貢献している博物館の存在意義は極めて大きい。特別企画「むかしのくらしと学校」は、特色ある事業として高く評価できる。校区や授業時間の関係から市内全域の小・中学校が参加することは難しいが、特別企画の展覧会を含めて多くの利用、参加があった。「あかりのうつりかわり」の出前授業は体験型の学習となっており、小学生の発達段階にあった内容で、興味関心をもって取り組むことができる内容である。また、「市の様子のうつりかわり」では千里ニュータウンの様子など、身近な内容を学習する機会となり、学習内容の充実に貢献している。実物に触れることで、自分たちの今の生活と比較して、当時の暮らしを想起することができ、社会の変化を実感することができた。今と昔、その変遷を学ぶ貴重な機会となり得たかもしれないので、長期休業などに中学生も多く見学して欲しかった。さらなる展示内容や学習コンテンツの充実に期待する。その他、令和5年度に小学校に残る資料等が博物館に寄贈されている。地域の小学校の歴史についての展示を行い、見る機会を作してほしい。 中学校との連携では、現状はキャリア教育に繋がる「職場体験」や「職業講話」という内容のみになっている。小学校のように、授業と関連づけることはできないだろうか。国語、社会、理科、美術などの授業において、作品発表やプレゼンテーションの際に学芸員を派遣し、専門的な見地(研究者としての視点)で講評をするなど、連携できそうである。また、春季特別展「繁栄した湾口の湊津」の中学生企画イベント「土器つとビンゴ」のような生徒が企画するイベントを今後も進めたり、講座室で音楽を聞くイベントも考えていただくと新たな客層が増えるのではないかな。 次期学習指導要領策定へ向けた中央教育審議会の部会では、主体的、対話的、深い学びを更に進めることと併せて、「探求的な学習」の重要性が論点になっている。教科の学習、特に総合的な学習における地域資源の活用は有効であり、博物館などの施設も生徒が探求的な学びを進める際に活用できる。見学や出前授業以外にも学芸員をゲストティーチャーと呼んでもらうなど、博物館が子供たちにより親しまれるよう、さらに積極的に攻めて行く必要がある。 また、博物館が市教育センターと連携して、不登校生徒を対象にした「職場体験学習の場づくり」として市教育支援教室の生徒を対象に施設見学と職場体験を行うなど学校教育に参画する姿勢は大いに評価される。 《人材育成》 実習生、インターンの受け入れを行い、博物館としての後進育成に貢献した。吹田市の特徴は、大学・研究機関・文化施設の充実した町であるので、「大学生による館蔵品展」は、継続的に行われているとても重要な取り組みである。アンケートをみると厳しい意見があるものの、それも含めて学生にとっては良い経験になると思う。引き続き、実習等を積極的に受け入れてほしい。	A	
		実績	事業実施件数 1回						
	(基本事業) b. 他機関との連携事業	指標・目標	事業実施件数 1回/年	A					
		実績	事業実施件数 1回						
(中項目) ②学校教育との連携									
(小項目)	(重点項目) a. 学校教育による利用の促進	指標・目標	学校団体見学校数 18校 出前授業件数 7校 教員への研修 1回/年	A					
		実績	学校団体見学校数 22校 出前授業件数 10校 教員への研修 1回						
	(基本事業) b. 学校教育への支援	指標・目標	設定していない	A					
		実績	自己評価欄に記載						
(中項目) ③人材育成									
(小項目)	(基本事業) a. 実習・研修等の受け入れ	指標・目標	実習受入11校・人数 24人 インターンシップ人数 1人 JICA研修受入人数 5人	A					
		実績	実習受入11校・人数 17人 インターンシップ人数 3人 JICA研修受入人数 0人						